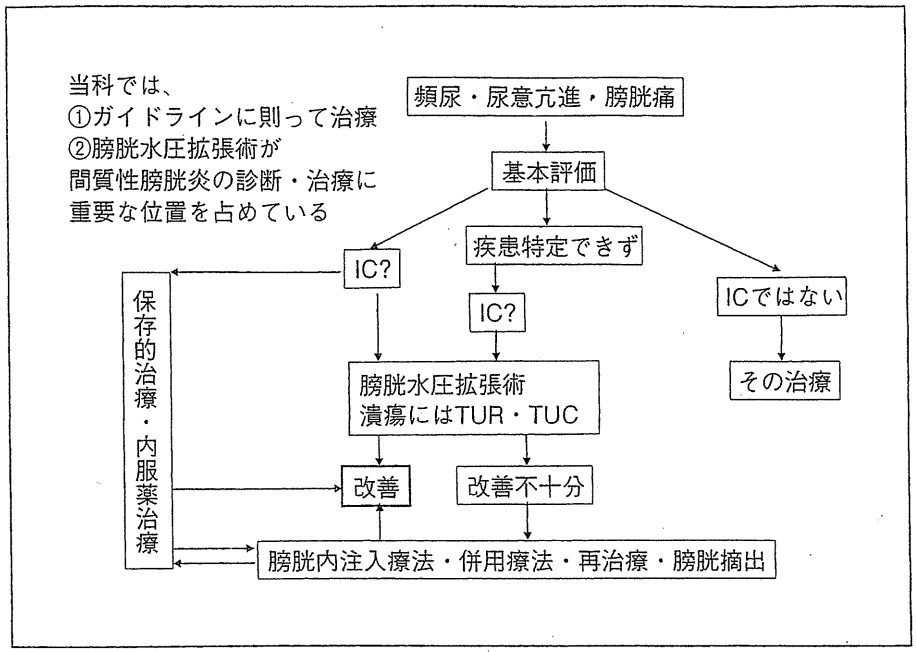


図 1　診療の基本的な流れ
(日本間質性膀胱炎研究会ガイドライン作成委員会：間質性膀胱炎診療ガイドライン．ブラックウェルパブリッシング，東京，2007 より転載改変)

訴える患者には簡単な問診に引き続き，主要下部尿路症状質問票 (CLSS)[14] (図 2) による症状の評価を行う。これは，特定の疾患に限らず重要な症状を漏れなく聞き出すための問診票で，10 個の症状に対して 4 段階で回答を求めるものである。間質性膀胱炎患者では膀胱痛や尿道痛の訴えが多いが，頻尿，尿意切迫感，排尿困難，残尿感など多彩な症状も強く感じていることがわかる。この結果で間質性膀胱炎が疑われるようなら，第二ステップとして，O'Leary & Sant による間質性膀胱炎の症状スコア (図 3) と問題スコア[15] (図 4) と排尿日誌を記録してもらい，症状・排尿状態を確認する。

O'Leary & Sant による間質性膀胱炎の症状スコアと問題スコアは，間質性膀胱炎の自覚症状をスケール化したもので，多彩な間質性膀胱炎の症状の評価を容易にしている。しかし，このスコアから漏れている症状も多く，点数配分にも疑問がある。また，これは IC 患者の症状の程度を簡便に評価するための尺度であり，IC の診断基準に用いるものではないという点についても留意すべきである。

排尿日誌に関して注意点を述べる。多くの泌尿器科医は，間質性膀胱炎というと頻尿，1 回排尿量減少 (明確な基準はない) をきたしているとイメージされるが，意外に 1 回量が保たれ，回数もさほど増えていない場合もあるので注意が必要である。

IC 症状は，寒冷，食事，疲労，生理，尿の濃縮などの外的・内的因子によっても症状が左右されることが多く見受けられ[16]，ややもすれば，不定愁訴と取られがちである。しかし，そういった因子で症状が悪化・寛解することの再現性を患者が自覚している場合，むしろそれは IC を強く疑う所見である。また，患者の多くは，自らの症状を訴えて複数の医療機関を受診し，そのうちの多くが過活動膀胱と診断されて抗コリン剤などで治療されている場合も多い。

5 検査

IC を疑う場合の検査には，①除外診断を行うためのものと，②診断を確定するためのものがある。

前者は尿検査 (定性検査，培養，細胞診など)，画像検査 (超音波検査，CT など)，病理組織学的検査で IC 症状をきたし得る鑑別疾患の除外のために行われる検査で，ほとんどが外来で実施することができる検査である。ここまでは，膀胱鏡検査を行わなくても大方必要な除外診断を行うこと

この1ヶ月の状態にあてはまる回答を1つだけ選んで、数字に○をつけて下さい。

何回くらい、尿をしましたか					
1	朝起きてから寝るまで	0	1	2	3
		7回以下	8～9回	10～14回	15回以上
2	夜寝ている間	0	1	2	3
		0回	1回	2～3回	4回以上

以下の症状が、どれくらいの頻度でありましたか					
		なし	たまに	時々	いつも
3	我慢できないくらい、尿がしたくなる	0	1	2	3
4	我慢できずに、尿がもれる	0	1	2	3
5	セキ・クシャミ・運動の時に、尿がもれる	0	1	2	3
6	尿の勢いが弱い	0	1	2	3
7	尿をするときに、お腹に力を入れる	0	1	2	3
8	尿をした後に、まだ残っている感じがする	0	1	2	3
9	膀胱（下腹部）に痛みがある	0	1	2	3
10	尿道に痛みがある	0	1	2	3

1から10の症状のうち、困る症状を3つ以内で選んで番号に丸をつけてください

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	0該当なし

上で選んだ症状のうち、もっとも困る症状の番号に丸をつけてください（1つだけ）

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	0該当なし

37)　現在の排尿の状態がこのまま変わらずに続くとしたら、どう思いますか?

0	1	2	3	4	5	6
とても満足	満足	やや満足	どちらでもない	気が重い	いやだ	とていやだ

図 2　下部尿路症状質問票

ができ，間質性膀胱炎の臨床診断を下すことができる。

OAB との鑑別に迷う症例においては，尿流動体検査を行うこともあるが，OAB 症例で排尿筋過活動を認めない症例が 24～55％認められるのに対し，逆に IC 症例においては約 15％で排尿筋過活動が認められることが報告されており，両者の鑑別に本検査を用いるのはコスト面を勘案しても有用とはいえない[17～20]。

後者は膀胱粘膜所見を得るために行う膀胱鏡検

この1ヶ月のご自身の排尿・尿漏れの状況を思い出して該当する□にレを入れてください。

1）急に我慢できなくなって尿をすることが、どれくらいの割合でありましたか？

0. □	全く無い
1. □	5回に1回の割合より少ない
2. □	2回に1回の割合より少ない
3. □	2回に1回の割合くらい
4. □	2回に1回の割合より多い
5. □	ほとんどいつも

2）尿をしてから2時間以内にもう一度しなくてはならないことがありますか？

0. □	全く無い
1. □	5回に1回の割合より少ない
2. □	2回に1回の割合より少ない
3. □	2回に1回の割合くらい
4. □	2回に1回の割合より多い
5. □	ほとんどいつも

3）夜寝てから朝起きるまでに、普通何回、尿をするために起きましたか?

0. □	0回
1. □	1回
2. □	2回
3. □	3回
4. □	4回
5. □	5回もしくはそれ以上

4）膀胱や尿道に痛みや焼けるような感じがありましたか?

0. □	まったくない
2. □	たまたま
3. □	しばしば
4. □	だいたいいつも
5. □	ほとんど常に

OSSI合計 _____点

図 3　O'Leary & Sant's symptom score

査・膀胱水圧拡張術である。先にも述べたが，ICにおいては特異的な所見を認める検査はないが，膀胱鏡検査では，通常認められない膀胱粘膜の変化が認められるため，間質性膀胱炎と診断するためにはほぼ必須の検査であると考える[21]。他の膀胱癌などの膀胱・尿道の病変の確認，除外診断を行ううえでも薦められる検査である[22]。しかし，筆者らの施設では以下の理由で間質性膀胱炎を強く疑う患者に対して外来膀胱鏡検査を積極的には行っていない。

①検査に伴って膀胱痛をきたし，被験者の苦痛を強いることにもなりかねない。

②無麻酔下であると十分に膀胱を拡張できず，粘膜病変の十分な観察ができない。

③仮に潰瘍を認めても電気メスを用いてその切除・焼灼を行えず，結果として患者に二度手間を強いる。

筆者らの施設では，膀胱鏡を除く諸検査で間質

この１ヶ月、以下のことでどのくらい困っていますか。該当する□にレを入れてください。

5）起きている間に何度も尿をすること

0. □　困っていない
1. □　ほんの少し困っている
2. □　少し困っている
3. □　困っている
4. □　ひどく困っている

6）尿をするために夜起きること

0. □　困っていない
1. □　ほんの少し困っている
2. □　少し困っている
3. □　困っている
4. □　ひどく困っている

7）急に尿を我慢できなくなること

0. □　困っていない
1. □　ほんの少し困っている
2. □　少し困っている
3. □　困っている
4. □　ひどく困っている

8）膀胱や尿道の焼けるような感じ、痛み、不快な感じ、押される感じ

0. □　困っていない
1. □　ほんの少し困っている
2. □　少し困っている
3. □　困っている
4. □　ひどく困っている

OSPI 合計　＿＿＿＿点

図 4　O'Leary & Sant's problem score

性膀胱炎を疑う場合，入院・麻酔下で膀胱水圧拡張術を行い，膀胱内の観察と併せて膀胱粘膜生検，膀胱の拡張（＝治療）を行っている。間質性膀胱炎における膀胱鏡所見は以下のとおりである。

1．最大膀胱容量の低下

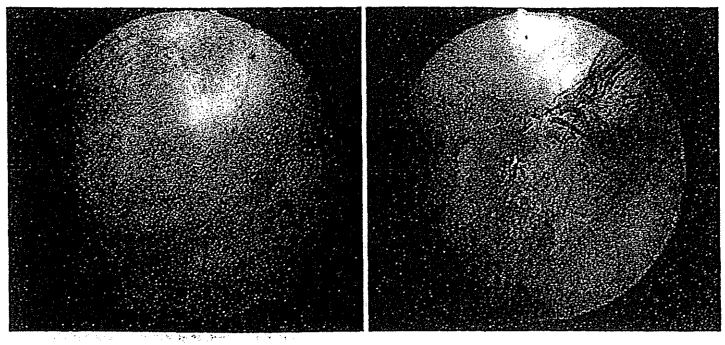
2．ハンナー潰瘍（図 5a）

膀胱上皮の欠損によるもので，間質性膀胱炎に特徴的な所見である。膀胱拡張に伴う亀裂，排水に伴う潰瘍とその周囲からの五月雨状/滝状の出血が認められる。ここで，よく誤解されるのが潰瘍の所見であるが，胃潰瘍のように膀胱粘膜の欠損や陥凹をきたしているような潰瘍はほとんどなく，実際には膀胱粘膜の発赤や浮腫，周囲の血管増生を認めるだけである。また，潰瘍部の組織は脆弱で多少の機械的刺激でも容易に出血する。

3．瘢痕（図 5b）

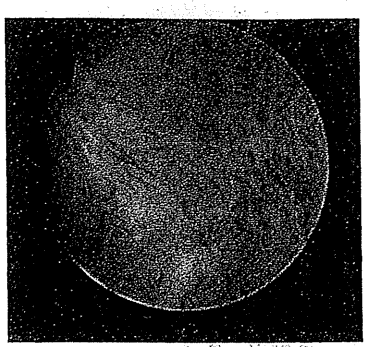
潰瘍型間質性膀胱炎でも潰瘍は寛解と増悪を繰り返しており，その治癒に伴う所見が瘢痕である。

a：ハンナー潰瘍

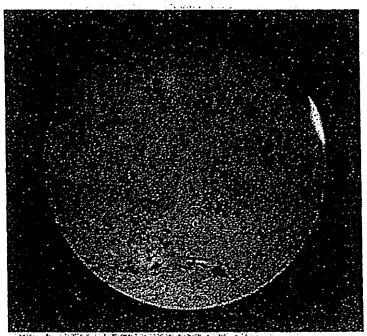


ハンナー潰瘍。左が拡張前の所見。右が拡張後の所見。拡張に伴い，潰瘍から出血している（滝状出血）。なお，拡張前に出血が明らかでない場合も多い。

b：瘢痕

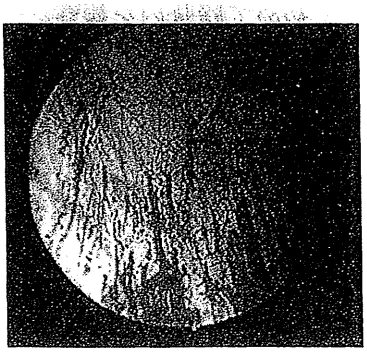


c：点状出血



拡張後，膀胱内の食塩水を排水していくと，粘膜から点状の出血斑が出現する。

d：五月雨状出血



上記よりも出血の程度が強いと，排水に伴い血液が膀胱底側に垂れていき，五月雨状の所見を呈する。

図 5　膀胱水圧拡張術における間質性膀胱炎の膀胱粘膜所見

拡張に伴い容易に亀裂を生じて出血する。

4．出血（図 5c，d）

間質性膀胱炎では，拡張後に排水すると，程度・範囲はさまざまであるが膀胱から出血を生じる。出血は容易に止血し，その後は粘膜に点状の出血斑が残る（点状出血，図 5c）。出血の程度が強いと出血点から血液が膀胱頸部に向かって流れる（五月雨状出血，図 5d）。これらの所見は間質性

膀胱炎と診断できる重要な客観的根拠であるが[23]，間質性膀胱炎でない場合でも出血を認めるとの報告もあり，感度・特異度は完全ではない。

ちなみに，間質性膀胱炎の症状・膀胱鏡所見と膀胱上皮内癌のそれは類似点が多く，膀胱粘膜生検を行い，膀胱上皮内癌の除外を行うことは重要である[22]。

6 間質性膀胱炎と過活動膀胱の鑑別診断とその実際

昨今は，ICに関する情報が普及しつつあり，頻尿に痛みを強く訴える典型的なICはいずれの疾患との鑑別は比較的容易である。問題となるのは非典型的な場合であり，この場合想定されるのは疼痛や違和感をほとんど訴えないICと，いわゆる難治性OABとの鑑別である。いずれの疾患も客観的所見に乏しく，特に疼痛が比較的軽度のICとOABでは尿意切迫感や頻尿が共通しているため，検査や質問票だけでそれらを鑑別することは難しい。鑑別のうえで検査や質問票と並んで重要と筆者が考えるのは問診である。

ICの本態は，尿路上皮のバリア機構の破綻である。すなわち，尿に含まれる物質によって症状が影響を受けやすいし，蓄尿すれば膀胱の伸展に伴って膀胱壁の知覚神経を刺激して違和感や疼痛を誘発する。

OABでも神経の活動を刺激する物質であれば，症状の悪化につながるかもしれないが，ICほどにその原因となる物質，食品は知られていない。比較的IC症例で特異的に聴取されるのは，香辛料など刺激物，クエン酸を多く含む食品（柑橘類，酢の物など）やカリウムを多く含む食品の摂取で頻尿や疼痛などの症状の悪化を自覚している場合が多く，しかも再現性がある。

蓄尿に伴う症状であるが，疼痛を訴えないIC症例の中には，疼痛を感じないように「前もって」トイレに行くようにして頻尿となっている場合もある。一見するとOABと間違われやすいが，筆者はOABとICを鑑別する1つの質問として，「尿意を催して我慢するとどうなるか」と訊いている。OABの場合は，失禁か尿意切迫を答えるが，ICの場合，疼痛や強い違和感を自覚すると答えることが多い。

したがって，ICとOABを鑑別する際の1つ重要なポイントは，問診で，①食品などによる現性のある症状悪化を認めないか，②尿意を我することで疼痛・違和感を誘発するか，を聞きすことである。ただし，これらの事項もあくまも参考事項にすぎず，ICを診断するための傍証しかならないことを留意すべきである。

問診，質問票，検査などでの評価を経てある度の見立てができた段階でどちらかに診断を仮して治療を行い，その経過を診ながら最終的に断していくことが実際には多い。

すなわち，ICを疑うならば，診断・治療を兼て麻酔下での膀胱水圧拡張術を行い，粘膜変化(状出血，五月雨状出血や潰瘍からの滝状出血)有無や，粘膜生検で得られた組織所見で診断の証としてICとの診断を行う。ICでない場合，常は拡張を行っても膀胱粘膜に前後で出血など変化を認めない。

逆にOABと仮定するならば，既往症・依存に注意しながら抗コリン剤を処方することとる。仮にICであると抗コリン剤の内服で排尿の収縮力が低下し，違和感や疼痛などいわゆIC症状の増悪を認める場合が多い。ただ，それも痛みを訴えず，難治性OABと認識されてボリヌス毒素膀胱壁内注入療法を行うに至り，そで初めて膀胱内を観察してICと診断されるこもある。

このように，両者のオーバーラップする症例鑑別は非常に難しく，最後は試行錯誤的になるが診断的治療を行うのが最後の一手となる。

7 おわりに

ICとOABがオーバーラップする症候を示す例では，これらを明確に鑑別するgold standardな存在しないのが現状である。したがって，ICとOABの鑑別を要する場合，ポイントを押えた問診，検査を行い，その時点でどちらかに診断を仮定して，治療を行う診断的治療のプロセスを経て最終的な診断に至るのが現状では肝要であると考える。

文献

1) 伊藤貴章，上田朋宏，武井実根雄，他：本邦における間質性膀胱炎 282 例の臨床統計と最近の動向．間質性膀胱炎研究会誌 **2**：19-23，2004
2) Simon LJ, Landis JR, Erickson DR, et al：The interstital cystitis data base study：concepts and preliminary baseline descriptive statistics. Urology **49**：64-75, 1997
3) Peeker R, Enerbach L, Fall M, et al：Recruitment, distribution and phenotypes of mast cells in interstitial cystitis. J Urol **163**：1009-1015, 2000
4) Parsons CL, Lilly JD and Stein P：Epithelial dysfunction of in nonbacterial cystitis (interstitial cystitis). J Urol **145**：732-735, 1991
5) Keay S, Kleinberg M, Zhang CO, et al：Bladder epithelial cells from patients with interstitial cystitis produce an inhibitor of heparin-binding epidermal growth factor-like growth factor production. J Urol **164**：2112-2118, 2000
6) Ochs RL：Autoantibodies and interstitial cystitis. Clin Lab Med **17**：571-579, 1997
7) Warren JW：Urinary tract infection and inflammation at onset of interstitial cystitis/painful bladder syndrome. Urol **71**：1085-1090, 2008
8) Rosamilia A, Cann L, Scurry J, et al：Bladder microvasculature and the effects of hydrodistension in interstitial cystitis. Urol **57**：132, 2001
9) Parsons CL, Bautista SL, Stein PC, et al：Cytoinjury factors in urine：a possible mechanism for the development of interstitial cystitis. J Urol **164**：1381-1384, 2000
10) Ueda T, Tamaki M, Ogawa O, et al：Over expression of platelet-derived endothelial cell growth factor/thymidine phosphorylase in patients with interstitial cystitis and bladder carcinoma. J Urol **167**：347-351, 2002
11) Goldman HB：Interstitial cystitis-the great enigma. J Urol **164**：1921, 2000
12) 日本間質性膀胱炎研究会ガイドライン作成委員会：間質性膀胱炎診療ガイドライン，東京，ブラックウェルパブリッシング，2007
13) Homma Y, Udea T, Hikaru T, et al：Clinical guidelines for interstitial cystitis and hypersensitive bladder syndrome. Int J Urol **16**：597-615
14) Homma Y, Yoshida M, Yamanishi T, et al：Core lower urinary tract symptom score (CLSS) questionnaire：a reliable tool in the overall assessment of lower urinary tract symptoms. Int J Urol **15**：816-20 2008
15) O'Leary MP, Sant GR, Fowler FJ Jr, et al：The interstitial cystitis symptom index and problem index. Urology **49** (Suppl 5A)：58-63, 1997
16) Koziol JA, Clark DC, Gittes RF, et al：The natural history of interstitial cystitis：a survey of 374 patients. J Urol **149**：465-469, 1993
17) Digesu GA, Khullar V, Cardozo L, et al：Overactive bladder symptoms：do we need urodynamics? Neurourol Urodyn **22**：105-108, 2003
18) Flisser AJ, Walmsley K and Blaivas JG：Urodynamic classification of patients with symptoms of overactive bladder. J Urol **169**：529-533, 2003
19) Kim SH, Kim TB, Kim SW, et al：Urodynamic findings of the painful bladder syndrome/interstitial cystitis：a comparison with idiopathic overactive bladder. J Urol **181**：2550-2554, 2009
20) Irwin P and Samsudin A：Reinvestigation of patients with a diagnosis of interstitial cystitis：common things are sometimes common. J Urol **174**：584-587, 2005
21) Rabe HH, Gotoh M and Momose H：The place of cystoscopy and hydrodistension in the diagnosis of interstitial cystitis：a potpourri of opinions emanating from an international consultation on IC in Kyoto, Japan, March 28-30, 2003. Int J Urol **10** (Suppl)：S16-S18, 2003
22) Rosamilia A：Pathology of interstitial cystitis. Int J Urol **10** (Suppl1)：S11-S15, 2003
23) Waxman JA, Sulak PJ and Kuehl TJ：Cystoscopic findings consistent with interstitial cystitis in normal women enrolled in the interstital cystitis data base (ICDB) study. Urology **49** (Suppl1)：81-85, 1997

INTERNATIONAL JOURNAL OF UROLOGY

International Journal of Urology (2012) 19, 86–89 doi: 10.1111/j.1442-2042.2011.02883.x

Short Communication

Admissions related to interstitial cystitis in Japan: An estimation based on the Japanese Diagnosis Procedure Combination database

Toru Sugihara,[1,2] Hideo Yasunaga,[3] Hiromasa Horiguchi,[3] Mitsuhiro Nakamura,[4] Akira Nomiya,[2] Hiroaki Nishimatsu,[2] Shinya Matsuda[5] and Yukio Homma[2]

[1]Department of Urology, Shintoshi Hospital, Iwata, Departments of [2]Urology and [3]Health Management and Policy, Graduate School of Medicine, and [4]School of Public Health, The University of Tokyo, Tokyo, and [5]Department of Preventive Medicine and Community Health, University of Occupational and Environmental Health, Fukuoka, Japan

Abbreviations & Acronyms
IC = Interstitial cystitis
DPC = Diagnosis Procedure Combination
JUA = Japanese Urological Association

Correspondence: Toru Sugihara M.D., M.P.H., Department of Urology, The University of Tokyo, 7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-8655, Japan. Email: ezy04707@nifty.com

Received 21 May 2011; accepted 27 September 2011. Online publication 1 November 2011

Abstract: We estimated the incidence of admissions related to interstitial cystitis in Japan using a national administrative claims database, the Diagnosis Procedure Combination database, which included information for 53.6% of urological training hospitals certified by the Japanese Urological Association. "Admissions related to interstitial cystitis" was defined as those cases whose ICD-10 code for the main reason for admission was N301 (interstitial cystitis) between 2007 and 2009. Among 8.42 million inpatient cases, 784 female and 212 male patients with interstitial cystitis were identified. The ratio of females to males was 3.69 and the median age was 67 years (range 5–92 years). The admission incidence (per 100 000 person-years) in females and males was estimated to be 1.35 (95% confidence interval 1.25–1.46) and 0.37 (0.31–0.42), respectively. This incidence is low compared with other reports. Possible reasons for this finding include racial difference, clinical examination methods, lack of outpatient data and poor health-care coverage of interstitial cystitis.

Key words: bladder, epidemiology, incidence, interstitial cystitis, Japan.

Introduction

Interstitial cystitis (IC) is a chronic disease of the urinary bladder characterized by lower urinary tract symptoms, such as urinary frequency, bladder hypersensitivity and/or bladder pain and resultant serious impairment of quality of life.[1]

Although the National Institute of Arthritis, Diabetes, Digestive and Kidney Disease proposed the diagnostic criteria of IC for research use in 1988,[2] it has not been widely used in the clinical setting because of its strictness and complicacy. To promote research activity and medical care of IC in Japan and East Asia, the Clinical Guidelines for IC were established by the Society of Interstitial Cystitis of Japan in 2007.[1]

Estimation of the incidence or prevalence of IC in the general population is difficult because of its rarity. Although several articles estimating the incidence or prevalence of IC have been published,[3–10] many of them were based on restricted sample populations (i.e. office visitors and nurses' cohort) or scoring questionnaire research and few focused on male patients. To our knowledge, just three articles from the USA have been published to estimate the male and female incidence or prevalence of IC in the general population based on clinical diagnosis.[5,9,10]

The present study evaluated the incidence of admissions related to IC in both the male and female general population in Japan, using the Diagnosis Procedure Combination (DPC) database, which is a nationwide administrative database.

Methods

The DPC database

The DPC database is a case-mix inpatient claims database.[11–14] During our study period of 2007–2009, the database contains annually approximately 2.6 million inpatient cases from approximately 850 hospitals from July to December (6 months per each year), which represents approximately 44% of all acute care inpatient hospitalizations in Japan. Given the anonymous nature of the data collection process, informed consent was not required. Study approval was obtained from the Institutional Review Board in the University of Occupational and Environmental Health.

Japanese Urological Association-certified hospitals

The Japanese Urological Association (JUA) is the professional urological association in Japan. The JUA certifies urological specialists and hospitals where the teaching system is ensured (JUA-certified hospitals).

Study samples

In the DPC database, one disease should be assigned to "the main reason for admission" category. We defined "admissions related to IC" as those cases whose ICD-10 code for the main reason for admission was N301 (IC), and we identified them from the DPC database in 2007–2009.

Estimation of prevalence of IC

We estimated the incidence of admissions related to IC based on stratified hospital bed volume. First, we collected the number of beds in all JUA-certified hospitals and hospitals that had joined the DPC database. Hospitals were stratified with bed volume categories. The estimated annual number of IC cases (Yi) and the 95% confidence intervals (CI) were calculated with the following equation using Wald confidence intervals for the population proportion:[13]

$$Yi/Ni = pi \pm Z\sqrt{pi(1-pi)/(ni \times 1.5)}$$

where Ni is the number of beds in all JUA-certified hospitals, ni is the number of beds in JUA-certified hospitals that joined the DPC database, $pi = Xi/(ni \times 1.5)$ (Xi is the observed number of IC cases in JUA-certified hospitals that joined the DPC database between July and December, 2007–2009), and $Z = 1.96$.

Results

Among 8.42 million inpatients in the study population, we identified 996 admissions related to IC (Table 1). The ratio of females to males was 3.69 and the median age was 67 years (range 5–92 years). Almost all patients (95.3%) were hospitalized in JUA-certified hospitals. A vast majority of patients underwent cystoscopic intervention. Although they were minor, cystectomies and augmentation cystoplasties were also selected for therapy.

Table 1 Distribution of male and female interstitial cystitis patients from the Diagnosis Procedure Combination database

Total	Males	Females
	212 (100.0%)	784 (100.0%)
Age (years)		
≤19	4 (1.9%)	9 (1.1%)
20–29	5 (2.4%)	29 (3.7%)
30–39	7 (3.3%)	42 (5.4%)
40–49	9 (4.2%)	47 (6.0%)
50–59	26 (12.3%)	95 (12.1%)
60–69	65 (30.7%)	215 (27.4%)
70–79	75 (35.4%)	268 (34.2%)
80–89	20 (9.4%)	76 (9.7%)
≥90	1 (0.5%)	3 (0.4%)
Median (IQR)	67 (59–76)	67 (57–74)
Year		
2007	80 (37.7%)	263 (33.5%)
2008	58 (27.4%)	242 (30.9%)
2009	74 (34.9%)	279 (35.6%)
JUA hospital	200 (94.3%)	750 (95.7%)
Intervention		
Cystoscopic interventions including hydrodistension	176 (83.0%)	706 (90.1%)
Augmentation cystoplasty	2 (0.9%)	2 (0.3%)
Simple cystectomy	1 (0.5%)	2 (0.3%)
Implantation of spinal cord stimulation apparatus	3 (1.4%)	1 (0.1%)
Missing or others	30 (14.2%)	73 (9.2%)

IQR, interquartile range; JUA, Japanese Urological Association.

Table 2 shows the distribution of hospitals and IC cases stratified with bed volume categories. Overall, the DPC database covered 53.6% of JUA-certified hospitals and 63.4% of those beds. The estimated annual number of IC cases per year was 886 in females and 231 in males. According to the Population Census Data, the population of Japan in 2008 was approximately 65.44 million females and 62.25 million males; therefore, the incidence of admission related to IC (per 100 000 person-years) in females and males was estimated as 1.35 (95% CI 1.25–1.46) and 0.37 (0.31–0.42), respectively.

Table 2 Estimated incidence of admissions related to interstitial cystitis in Japan

Bed volume	JUA-certified hospitals (2007–2009)		JUA-certified hospitals that joined the DPC database (2007–2009)				No. IC patients in the DPC database for 1.5 years [*Xi*]†		Estimated annual no. IC patients (95% confidence interval) [*Yi*]‡	
	n	No. of beds [*Ni*]	*n*		No. of beds [*ni*]		Males	Females	Males	Females
≥800	62	60 768	50	80.6%	50 278	82.7%	42	183	34 (24–44)	147 (126–169)
600–799	107	72 437	80	74.8%	54 394	75.1%	31	115	28 (18–37)	102 (83–121)
400–599	336	161 951	224	66.7%	109 834	67.8%	41	165	40 (28–53)	162 (137–187)
200–399	512	153 265	269	52.5%	81 480	53.2%	94	273	118 (94–142)	342 (302–383)
≤199	231	30 486	46	19.9%	7406	24.3%	4	48	11 (0–22)	132 (95–169)
Total	1248	478 907	669	53.6%	303 392	63.4%	212	784	231 (198–263)¶	886 (819–952)¶
Total population in 2008 (100 000 persons)									622.5	654.4
Incidence (per 100 000 person-years)									0.37 (0.31–0.42)	1.35 (1.25–1.46)

†Data were collected from six months (July to December) of each 3 years (2007–2009). ‡$Yi/Ni = pi \pm 1.96 \times \sigma i$, where $pi = Xi/(ni \times 1.5)$, $\sigma i^2 = pi\,(1 - pi)/(ni \times 1.5)$. ¶$\Sigma Yi = \Sigma(Ni \times pi) \pm 1.96 \times (\Sigma Ni \times \sigma i^2)^{0.5}$. DPC, Diagnosis Procedure Combination; IC, interstitial cystitis; JUA, Japanese Urological Association.

Discussion

In the present study, we used a large administrative database and identified IC with a registered ICD-10 code. A similar method was used in two previous studies using Kaiser Permanente Northwest, a health maintenance organization in Portland, Oregon, USA. Clemens *et al.*[9] reported that "the prevalence" of IC during 1998–2002 was 197 and 41 per 100 000 in females and males, respectively, when IC was defined as the ICD-9 code 595.1, and Patel *et al.*[5] reported that "the incidence" of IC during 2002–2005 was 15 per 100 000 in females (no male patients were identified). Therefore, there is a 10-fold discrepancy between our results and those of Patel *et al.*

The incidence of IC varies widely, even though IC is diagnosed by clinical examination. Robert *et al.* analyzed Olmsted Country cohort data (1976–1996) and reported that the incidence of IC diagnosed through cystoscopic intervention was 1.6 and 0.6 per 100 000 in females and males, respectively.[10] Leppilahti *et al.* carried out a clinical examination in Finnish people who scored high points in the O'Leary-Sant IC symptom and problem index (OLS) questionnaire, and concluded that the prevalence of probable IC in women was 230 per 100 000 and that of possible/probable IC was 530 per 100 000.[8]

Recently, several questionnaires measuring the severity of IC, such as the OLS, have been developed. According to some OLS-based surveys, the prevalence of possible IC or painful bladder syndrome (per 100 000 females) is estimated to be 575 in the USA,[7] 306 in Austria,[6] 265 in Japan[4] and 261 in Korea.[3] These data suggest that there is some racial discrepancy between Asia, European countries and the USA, but the differences seem not so largely radical to solely explain the 10-fold gap. This implies that several IC patients remain undiagnosed and untreated in Japan.

Although the Clinical Guidelines for IC were released in January 2007 in Japan to promote research and clinical activity for IC,[1] the number of patients did not increase (Table 1). We consider there to be two possible reasons for this finding. First, racial variants and differences in database background could be attributed to our low IC incidence. In particular, the DPC database did not contain outpatient cases and our result of "incidence of admission related to IC" did not directly represent overall IC incidence. A previous report described that hydrodistension can be safely carried out under local anesthesia without hospitalization.[15] Second, Japanese national health-care insurance does not currently cover hydrodistension. Special approval from authorities is required to carry out hydrodistension (this restriction was lifted in April 2010).

Finally, we showed that the DPC database is highly represented in the urological field. The database coverage rate is approximately 35% of whole acute care beds,[13] but by restriction to JUA-certified hospitals, it increased to 53.6%. This high coverage enables accurate clinical assessment.

There are several limitations in the present study. First, the definition of IC was only based on an ICD-10 code in the administrative database. Neither chart reviews nor scoring questionnaires were available in the database. Second, because the present study was based on administrative claims data, the validity and reliability of the written diagnoses were limited, resulting in underestimation.

The incidence of admission related to IC from the DPC database (per 100 000 person-years) is estimated as 1.35 in

females and 0.37 in males. Possible reasons for this low incidence include racial difference, clinical examination methods, lack of outpatient data and poor health-care coverage for IC.

Acknowledgment

The present study was funded by a Grant-in-Aid for Research on Policy Planning and Evaluation from the Ministry of Health, Labour and Welfare, Japan (Grant number: H19-Policy-001).

Conflict of interest

None declared.

References

1 Homma Y, Ueda T, Tomoe H *et al.* Clinical guidelines for interstitial cystitis and hypersensitive bladder syndrome. *Int. J. Urol.* 2009; **16**: 597–615.
2 Hanno PM, Landis JR, Matthews-Cook Y, Kusek J, Nyberg L Jr. The diagnosis of interstitial cystitis revisited: lessons learned from the National Institutes of Health Interstitial Cystitis Database study. *J. Urol.* 1999; **161**: 553–7.
3 Choe JH, Son H, Song YS, Kim JC, Lee JZ, Lee KS. Prevalence of painful bladder syndrome/interstitial cystitis-like symptoms in women: a population-based study in Korea. *World J. Urol.* 2011; **29**: 103–8.
4 Inoue Y, Mita K, Kakehashi M, Kato M, Usui T. Prevalence of painful bladder syndrome (PBS) symptoms in adult women in the general population in Japan. *Neurourol. Urodyn.* 2009; **28**: 214–18.
5 Patel R, Calhoun EA, Meenan RT, O'Keeffe Rosetti MC, Kimes T, Clemens JQ. Incidence and clinical characteristics of interstitial cystitis in the community. *Int. Urogynecol. J. Pelvic Floor Dysfunct.* 2008; **19**: 1093–6.
6 Temml C, Wehrberger C, Riedl C, Ponholzer A, Marszalek M, Madersbacher S. Prevalence and correlates for interstitial cystitis symptoms in women participating in a health screening project. *Eur. Urol.* 2007; **51**: 803–8.
7 Rosenberg MT, Hazzard M. Prevalence of interstitial cystitis symptoms in women: a population based study in the primary care office. *J. Urol.* 2005; **174**: 2231–4.
8 Leppilahti M, Sairanen J, Tammela TL, Aaltomaa S, Lehtoranta K, Auvinen A. Prevalence of clinically confirmed interstitial cystitis in women: a population based study in Finland. *J. Urol.* 2005; **174**: 581–3.
9 Clemens JQ, Meenan RT, O'Keeffe Rosetti MC, Gao SY, Calhoun EA. Prevalence and incidence of interstitial cystitis in a managed care population. *J. Urol.* 2005; **173**: 98–102.
10 Roberts RO, Bergstralh EJ, Bass SE, Lightner DJ, Lieber MM, Jacobsen SJ. Incidence of physician-diagnosed interstitial cystitis in Olmsted County: a community-based study. *BJU Int.* 2003; **91**: 181–5.
11 Sugihara T, Yasunaga H, Horiguchi H *et al.* Impact of hospital volume and laser use on postoperative complications and in-hospital mortality in cases of benign prostate hyperplasia. *J. Urol.* 2011; **185**: 2248–53.
12 Yasunaga H, Yanaihara H, Fuji K, Horiguchi H, Hashimoto H, Matsuda S. Impact of hospital volume on postoperative complications and in-hospital mortality after renal surgery: data from the Japanese Diagnosis Procedure Combination Database. *Urology* 2010; **76**: 548–52.
13 Sako A, Yasunaga H, Horiguchi H, Hashimoto H, Masaki N, Matsuda S. Acute hepatitis B in Japan: incidence, clinical practices and health policy. *Hepatol. Res.* 2011; **41**: 39–45.
14 Sugihara T, Yasunaga H, Horiguchi H, Nishimatsu H, Matsuda S, Homma Y. Incidence and clinical features of priapism in Japan: 46 cases from the Japanese diagnosis procedure combination database 2006–2008. *Int. J. Impot. Res.* 2011; **23**: 76–80.
15 Aihara K, Hirayama A, Tanaka N, Fujimoto K, Yoshida K, Hirao Y. Hydrodistension under local anesthesia for patients with suspected painful bladder syndrome/interstitial cystitis: safety, diagnostic potential and therapeutic efficacy. *Int. J. Urol.* 2009; **16**: 947–52.

間質性膀胱炎

頻尿・尿意亢進・尿意切迫感・膀胱痛・骨盤痛などの症状が見られる間質性膀胱炎。その診断方法について解説します。

東京大学医学部附属病院 泌尿器科 助教
野宮 明 先生

間質性膀胱炎とは

間質性膀胱炎は、1914年にHunnerによってはじめて報告された原因不明の膀胱の慢性炎症疾患で、頻尿・尿意亢進・尿意切迫感・膀胱痛・骨盤痛などを呈する疾患です。全例ではありませんが、疼痛を訴える場合、蓄尿に伴って痛みが悪化して、排尿で緩和することが多いです。

間質性膀胱炎の病因・病態は、いまだ不明であり、有効な治療法が見出されていないがために患者のQOLは症状により著しく障害されているのが現状です。また、その多彩な症状も相俟って診断基準が確立されておりません。それゆえ、間質性膀胱炎症状の発症から診断に至るまで、当科の間質性膀胱炎外来受診者で平均5.0年を要し、多くの患者が症状を訴えて泌尿器科をはじめ、内科、産婦人科、麻酔科（ペインクリニック）などを受診し、満足のいく治療が受けられず、結果としてドクターショッピングをしているのが現状です。

最近、間質性膀胱炎の中でもハンナー潰瘍という炎症に伴う粘膜糜爛を有するタイプと有さないタイプとでは病態が異なる可能性を示唆されており、今後更なる病因病態の解明、治療法の開発に繋がることが期待されています。

間質性膀胱炎の診断

確立された間質性膀胱炎の診断基準は存在しないのですが、わが国では日本間質性膀胱炎研究会発行の「間質性膀胱炎診療ガイドライン」に加え、"Clinical guidelines for interstitial cystitis and hypersensitive bladder syndrome (Homma Y, et al. Clinical guidelines for interstitial cystitis and hypersensitive bladder syndrome. Int. J Urol. 16: 597-615)"に準拠して診断、治療を行っております。それによると主に3つのポイントがあります。

❶患者の自覚症状：頻尿、尿意切迫感、膀胱痛、骨盤痛など

本疾患の特徴を一言で言えば、やはり膀胱痛です。疼痛を訴えない場合もあり、注意が必要ですが、蓄尿痛などの膀胱痛の訴えがある場合、間質性膀胱炎である可能性が高いです。

❷膀胱粘膜所見：膀胱拡張に伴う粘膜からの出血（点状出血、五月雨状出血）、潰瘍やそこからの滝状出血、潰瘍の治癒に伴う瘢痕、粘膜の引きつれなど

このような粘膜の変化は正常な膀胱粘膜では見られません。

❸除外診断：同様の症状を呈する尿路感染症、膀胱結石症、過活動膀胱、膀胱癌（特に上皮内癌）などの疾患の否定

とくにこの中で重要なのは悪性疾患（主に膀胱癌）の除外です。したがって、間質性膀胱炎を強く疑っても悪性疾患を完全に否定できない場合は、まずは膀胱水圧拡張術（後述）と膀胱粘膜生検を行うのは必須といえます。

診療の基本的なアルゴリズムは図1に示すとおりで、まずは自覚症状の聴取を行い、あわせて考えうる鑑別疾患の否定を行い、いよいよ間質性膀胱炎が疑わしい場合、膀胱水圧拡張術を行って膀胱粘膜の観察、最終診断を行います。

すなわち、間質性膀胱炎の診断は患者の症状・経過と検査所見を総合的に診ながら判断していく必要があるといえます。

ただ、診断基準がないため、現時点では原因不明の頻尿や膀胱痛を訴えている症例を診たら専門の施設に紹介するのが無難といえるかもしれません。

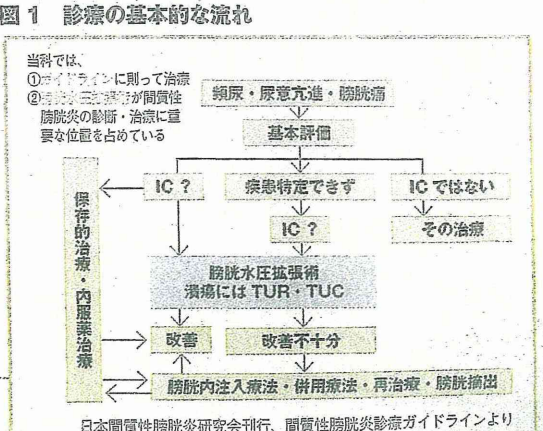
間質性膀胱炎の治療

現在、間質性膀胱炎の治療は2011年より保険適応となった膀胱水圧拡張術を中心として行うことが多いです。膀胱水圧拡張術は麻酔下で膀胱鏡下に膀胱内に生理食塩水を注入、内部を観察し、その後拡張、排水を行ってその間の粘膜の変化を観察します。間質性膀胱炎の場合、潰瘍や点状出血などの粘膜変化を認めることがほとんどです。本治療は、診断・治療を兼ねており、特に潰瘍を有する症例ではその切除・焼灼により疼痛の改善をもたらす場合が多く、本疾患の診断治療の要であるといえます。術後は、症状に応じて抗ヒスタミン薬、三環系抗うつ薬などの内服治療、DMSO（Dimethyl sulfoxide）、ヘパリンなどの膀胱内注入療法などを併用することが多いのですが、エビデンスが確立された治療は皆無に等しいのが現状で、多くの場合は個々の症例の状態に合わせて処方を調整しているのが現状です。

また、中には症状コントロール不良で膀胱摘出を行う症例も存在しますが、本疾患は良性疾患であるため、適応の選択には慎重を期すべきことは言うまでもありません。

参考：間質性膀胱炎診療ガイドライン

図1　診療の基本的な流れ



日本間質性膀胱炎研究会刊行、間質性膀胱炎診療ガイドラインより

TUR：経尿道的膀胱粘膜切除 TUC：経尿道的凝固術

Ann Hematol (2012) 91:1505–1506
DOI 10.1007/s00277-012-1419-0

LETTER TO THE EDITOR

Primary MALT lymphoma of the urinary bladder in the background of interstitial cystitis

Ken Morita · Fumihiko Nakamura · Yasuhito Nannya · Akira Nomiya · Shunya Arai · Motoshi Ichikawa · Yukio Homma · Mineo Kurokawa

Received: 17 January 2012 / Accepted: 23 January 2012 / Published online: 3 February 2012

Dear Editor,

Primary urinary bladder lymphoma is an extremely rare disease, and its frequency is identified as 0.2% of extranodal lymphomas [1]. Its dominant histology is mucosa-associated lymphoid tissue (MALT) lymphoma, also referred to as extranodal marginal zone lymphoma [2]. Here, we describe the first case of primary bladder MALT lymphoma that occurred in the setting of interstitial cystitis.

A 68-year-old Japanese female visited our institution with a 2-year history of persistent interstitial cystitis accompanying suprapubic pain and frequent urination. On admission, repeated urine culture showed no evidence of urinary tract infection. Urine cytology resulted in normal study. Treatment of interstitial cystitis was exerted by cystoscopy with hydrodistention, which discovered ulcers and increased vascularity on the bladder wall. Histopathology of the ulcerative lesions was notable for mucosal lymphoid follicles with interstitial infiltration of plasma cells and small lymphocytes (Fig. 1a). Immunophenotype of the lymphoid cells was CD3−, CD5−, CD10−, CD20+, and CD79a+. Deviated expression of immunoglobulin light chain was noted (Fig. 1b). Polymerase chain reaction amplification demonstrated monoclonal rearrangement of *immunoglobulin heavy chain* gene. Computed tomography scan showed a suprapubic mass occupying a portion of the bladder (Fig. 1c). Reduced size and thickened wall of the bladder were consistent with interstitial cystitis. F-18 fluorodeoxyglucose positron emission tomography and bone marrow biopsy were unremarkable. Taken together, we made a diagnosis of stage IE MALT lymphoma of the urinary bladder. Complete remission was recorded after four cycles of rituximab at a standard dose of 375 mg/m^2.

Primary bladder MALT lymphoma is featured by female preponderance and frequent history of chronic infectious cystitis [3]. It rarely disseminates to other organs or tissues and carries an excellent outcome. One explanation for its pathogenesis is that chronic bladder inflammation due to repetitive infection results in accumulation of extranodal lymphoid tissue, as is the case with *Helicobacter pylori* in gastric MALT lymphoma. Indeed, regression of bladder MALT lymphoma is achieved by antibiotic therapy [4]. In contrast, our case seems to have a different etiology because chronic urinary tract infection was absent.

Interstitial cystitis is a chronic inflammatory disorder. Its typical symptoms are suprapubic pain, urinary frequency, urgency, and nocturia. Although heterogeneous, interstitial cystitis possesses some aspects of autoimmunity [5]. The disease primarily affects females, and occasionally occurs in patients with systemic autoimmune diseases. Moreover, possible roles of autoantibodies against muscarinic receptor on the detrusor of the bladder have been suggested.

It is widely known that MALT lymphoma is associated with autoimmune disorders. In this setting, deregulated immune

K. Morita · F. Nakamura · Y. Nannya · S. Arai · M. Ichikawa · M. Kurokawa
Department of Hematology and Oncology, Graduate School of Medicine, The University of Tokyo,
7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku,
Tokyo 113-8655, Japan

A. Nomiya · Y. Homma
Department of Urology, Graduate School of Medicine,
The University of Tokyo,
7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku,
Tokyo 113-8655, Japan

M. Kurokawa (✉)
Department of Cell Therapy and Transplantation, The University of Tokyo Hospital,
7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku,
Tokyo 113-8655, Japan
e-mail: kurokawa-tky@umin.ac.jp

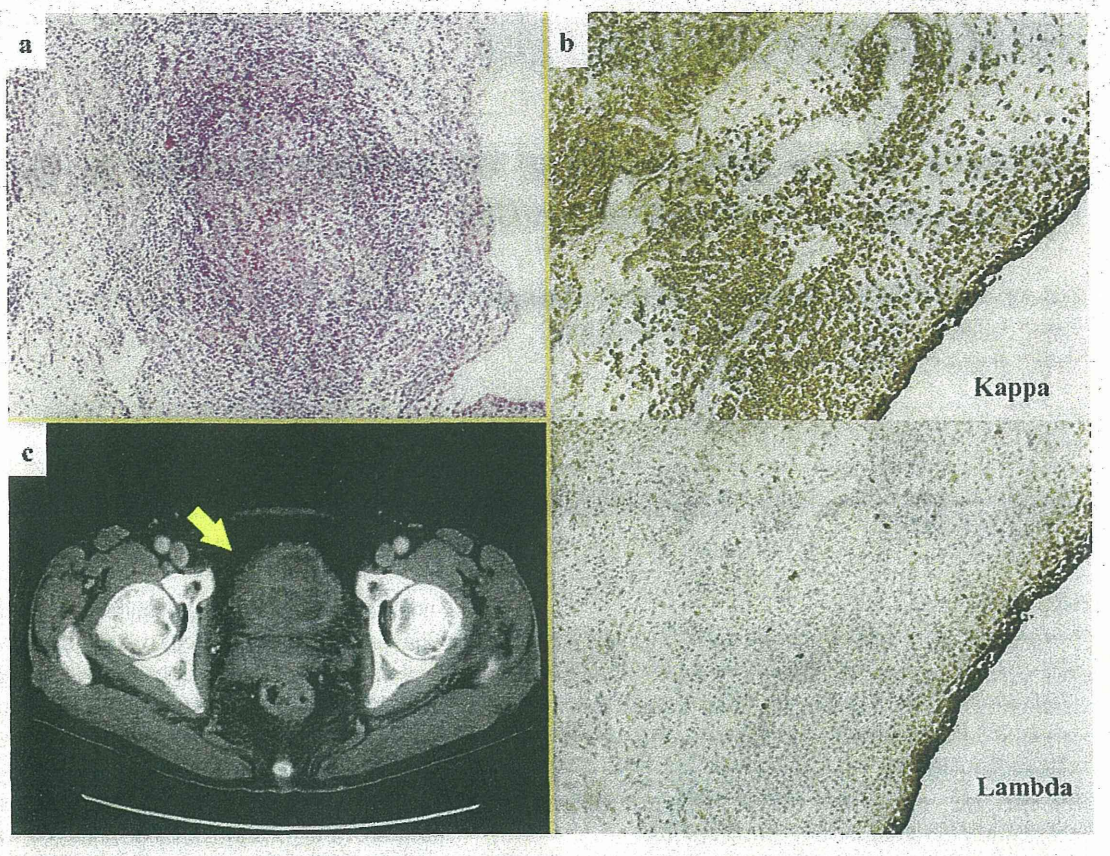


Fig. 1 Primary MALT lymphoma of the urinary bladder. **a** Light microscopic examination detected numbers of lymph follicles in the mucosal epithelium with interstitial infiltration of plasmacytes and small lymphocytes. **b** The lymphoid cells showed deviated expression of immunoglobulin kappa light chain. **c** Computed tomography scan revealed bladder lymphoma (*arrow*), thickened bladder wall, and reduced size of the bladder

response causes chronic inflammation in the target organ, which in turn triggers lymphomagenesis. For example, Sjögren's syndrome and Hashimoto's thyroiditis frequently underlie salivary gland and thyroid MALT lymphoma, respectively [6, 7]. Likewise, interstitial cystitis may result in MALT lymphoma of the urinary bladder.

Finally, presenting symptoms of bladder lymphoma substantially overlap those of interstitial cystitis. In our case, transurethral biopsy of bladder ulcers incidentally led to a diagnosis of MALT lymphoma. Careful follow-up with cystoscopy may help find this rare complication of interstitial cystitis.

References

1. Freeman C, Berg JW, Cutler SJ (1972) Occurrence and prognosis of extranodal lymphomas. Cancer 29(1):252–260
2. Hughes M, Morrison A, Jackson R (2005) Primary bladder lymphoma: management and outcome of 12 patients with a review of the literature. Leuk Lymphoma 46(6):873–877
3. Kempton CL, Kurtin PJ, Inwards DJ, Wollan P, Bostwick DG (1997) Malignant lymphoma of the bladder: evidence from 36 cases that low-grade lymphoma of the MALT type is the most common primary bladder lymphoma. Am J Surg Pathol 21(11):1324–1333
4. Oscier D, Bramble J, Hodges E, Wright D (2002) Regression of mucosa-associated lymphoid tissue lymphoma of the bladder after antibiotic therapy. J Clin Oncol 20(3):882
5. Van De Merwe JP, Arendsen HJ (2000) Interstitial cystitis: a review of immunological aspects of the aetiology and pathogenesis, with a hypothesis. BJU Int 85(8):995–999
6. Ambrosetti A, Zanotti R, Pattaro C, Lenzi L, Chilosi M, Caramaschi P, Arcaini L, Pasini F, Biasi D, Orlandi E, D'Adda M, Lucioni M, Pizzolo G (2004) Most cases of primary salivary mucosa-associated lymphoid tissue lymphoma are associated either with Sjoegren syndrome or hepatitis C virus infection. Br J Haematol 126(1):43–49
7. Thieblemont C, Mayer A, Dumontet C, Barbier Y, Callet-Bauchu E, Felman P, Berger F, Ducottet X, Martin C, Salles G, Orgiazzi J, Coiffier B (2002) Primary thyroid lymphoma is a heterogeneous disease. J Clin Endocrinol Metab 87(1):105–111

Neurourology and Urodynamics 31:148–155 (2012)

Effects of TRPV4 Cation Channel Activation on the Primary Bladder Afferent Activities of the Rat

Naoki Aizawa,[1] Jean-Jacques Wyndaele,[2] Yukio Homma,[3] and Yasuhiko Igawa[1]*
[1]Department of Continence Medicine, The University of Tokyo Graduate School of Medicine, Tokyo, Japan
[2]Faculty of Medicine, Department of Urology, University of Antwerp, Antwerp, Belgium
[3]Department of Urology, The University of Tokyo Graduate School of Medicine, Tokyo, Japan

Aims: Transient receptor potential vanilloid 4 (TRPV4) may affect afferent pathways innervating the bladder. We investigated the effects of GSK1016790A (GSK) and RN1734, a TRPV4 agonist and antagonist, respectively, and P2X-purinoceptor antagonists (TNP-ATP and PPADS) on cystometry (CMG), and the effect of GSK on single afferent fiber activities (SAAs) of the rat bladder and its relationship with capsaicin (Cap)-sensitivity. **Methods:** Conscious female Sprague–Dawley rats were used for CMG measurements. In SAA measurements, under urethane anesthesia, SAA was identified by electrical stimulation of the pelvic nerve and by bladder distention. Cystometric parameters were measured before and after intravesical drug instillation. In SAA measurements, response with saline instillation served as baseline. Then, GSK was instilled three times, and finally Cap was instilled to investigate the relationship with Cap-sensitivity. **Results:** Intravesical GSK-instillation transiently decreased bladder capacity and voided volume, which were counteracted by RN1734, TNP-ATP, and PPADS. In SAA measurements, Aδ-fibers (n = 7) were not affected by either GSK or Cap. Based on the Cap-sensitivity, C-fibers could be divided into two subtypes: Cap-insensitive (n = 14) and Cap-sensitive (n = 8). In the Cap-insensitive C-fibers, GSK significantly increased the SAAs during the first instillation, but the increase attenuated with time, whereas GSK did not significantly affect the Cap-sensitive C-fibers. **Conclusions:** The present results suggest that activation of TRPV4 in the bladder, probably urothelium, facilitates the micturition reflex by activation of the mechanosensitive, Cap-insensitive C-fibers of the primary bladder afferents in rats. *Neurourol. Urodynam. 31:148–155, 2012.* © 2011 Wiley Periodicals, Inc.

Key words: afferent nerves; desensitization; rats; transient receptor potential (TRP); urinary bladder

INTRODUCTION

The transient receptor potential vanilloid subfamily (TRPV) contains six proteins in mammals, and they are commonly divided into two subgroups based on sequence homology, functional similarities, and Ca^{2+}-selectivity; TRPV1–V4 and V5/6.[1] The subgroup of TRPV1–V4 members are weakly Ca^{2+}-selective cation channels, modulated by various intracellular signals and activated by temperature.[2,3] Expression of the TRPV1, V2, and V4 has been reported in human and rat/mouse urinary bladders.[4–10] Moreover, TRPV1 has been exploited clinically to desensitize bladder afferents and reduce bladder overactivity.[11] On the other hand, TRPV4 is sensitive to osmotic and mechanical stimuli, such as cell stretching or fluid flow.[12] Some previous studies show that TRPV4 may be modulated by calmodulin (CaM) and adenosine triphosphate (ATP), C-terminal CaM binding potentiating the current and Ca^{2+}-dependent CaM binding to the N-terminal desensitizing the current.[13–16]

Several researchers reported that TRPV4 is implicated in the regulation of urothelial ATP release that modulates the sensitivity of bladder afferent nerves.[7,8,17–19] In our previous study, the activation of the bladder mechanosensitive afferents induced by exogenous ATP was mainly through capsaicin (Cap)-insensitive (probably TRPV1-independent) C-fibers in the rat.[20] Therefore, it is conceivable that TRPV1 and TRPV4 have a role in the bladder afferent transduction via a different pathway.

In the present study, we focused on the afferent function of TRPV4, and investigated the effects of intravesical administration of GSK1016790A (GSK), a TRPV4 agonist, which has at least 300-fold greater potency for activating TRPV4 than 4α-PDD,[21] on single fiber activities of the primary bladder mechanosensitive afferent nerves.

MATERIALS AND METHODS

Animals

Forty-eight adult female Sprague–Dawley rats weighing 180–234 g were used. The rats were maintained under standard laboratory conditions with a 12:12 h light:dark cycle, and free access to food pellets and tap water. The protocol was approved by Animal Ethics Committees of The University of Tokyo Graduate School of Medicine and in line with NIH guidelines for the care and use of experimental animals.

Cystometry (CMG) Measurements

Rats were anesthetized with 30 mg/kg intraperitoneal pentobarbital sodium. A polyethylene catheter (Clay-Adams PE-50; Parsippany, NJ) was inserted in the bladder through the dome, and secured. After the operation, each rat was housed single in a cage.

Lori Birder led the review process.
Conflict of interest: none.
Grant sponsor: Ministry of Education, Culture, Sport, Science and Technology of the Japanese Government; Grant numbers: 40159588. 80595257.
*Correspondence to: Yasuhiko Igawa, M.D., Ph.D., Professor and Chairman, Department of Continence Medicine, The University of Tokyo Graduate School of Medicine, 7-3-1, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-8655, Japan.
E-mail: yigawa-jua@umin.ac.jp
Received 13 June 2011; Accepted 29 July 2011
Published online 28 October 2011 in Wiley Online Library (wileyonlinelibrary.com).
DOI 10.1002/nau.21212

Continuous CMG was performed on conscious rats 4 days after surgery. Each rat was placed without any restraint in a metabolic cage (3701M081; Tecniplast, Buguggiate, Italy) for at least 1 hr to adapt to the environment. The bladder catheter was connected to a pressure transducer (DX-100; Nihon Kohden, Tokyo, Japan) and microinjection syringe pump (KDS100; Muromachi, Tokyo, Japan) via a three-way tap. Saline at room temperature was continuously infused into the bladder at a rate of 0.08 ml/min. The basal pressure (BP; cmH_2O), micturition threshold (MT; cmH_2O), peak pressure (PP; cmH_2O), and voided volume (VV; ml) were recorded continuously on data acquisition program (Windaq; DATAQ Instruments Inc., Akron, OH). Bladder capacity (BC; ml) was calculated as intercontraction interval (ICI) × saline infusion rate into the bladder. All parameters were averaged for 20 min (10–30 and 40–60 min after drug administration), and investigated before and after drug instillation.

Afferent Measurements

The rats were anesthetized with urethane (1.5 g/kg intraperitoneally). Body temperature was maintained by a heated blanket at 38°C. Single afferent fiber measurements were performed as described before.[20,22,23] In brief, the left pelvic nerve was dissected from surrounding tissue proximal to the major pelvic ganglion. A pair of silver electrodes was placed around the pelvic nerve. A polyethylene catheter (Clay-Adams PE-50) was inserted in the bladder. Both L6 dorsal roots were cut close to their entrance to the spinal cord after the laminectomy. Fine filaments were dissected from the left L6 dorsal root and placed across shielded bipolar silver electrodes. Clearly different unitary action potentials of afferent fiber originating from the bladder were identified by electrical stimulation of the pelvic nerve and bladder distention with saline. These action potentials were discriminated by the Spike2 (CED, Cambridge, UK) impulse shape recognition program. Conduction velocity (CV) was calculated from the latency of response to electrical stimulation and the conduction distance between stimulation and recording sites, which was based on our anatomical data. Fibers were grouped based on CV. Those with a CV < 2.5 m/sec were considered to correspond to unmyelinated C-fibers and those with CV ≥ 2.5 m/sec to thinly myelinated Aδ-fibers.[24]

Protamine sulfate (PS) solution (10 mg/ml, 0.3 ml) was instilled intravesically and kept in the bladder for 60 min just before the measurement. Single fiber afferent activity was recorded during constant filling CMG with saline at 0.08 ml/min. Filling continued until an intravesical pressure of 30 cmH_2O was reached. The afferent activity caused by pelvic nerve stimulation was also recorded before and after bladder filling and confirmed to correspond with that caused by bladder filling.

At the beginning of the experiments, recording was repeated consecutively three times, at 5 min intervals to evaluate the reproducibility. The third recording served as the baseline value. After that, GSK was instilled three times according to the same time schedule as before GSK instillation; all three cycles of recording were used to evaluate the time-dependency and reproducibility of the drug effect. Then finally, Cap was instilled to investigate the relationship with Cap-sensitivity. The bladder was not washed out between each of multiple instillations.

Unitary afferent activity was evaluated in relation to intravesical pressure and volume. The relationship of nerve activity to pressure or volume was established by comparing nerve activity and intravesical pressure at 1-sec intervals. These values were then averaged at 5 cmH_2O interval of pressure or by dividing into five equal parts of volume in the filling phase. Average unitary activity was totaled as a function of intravesical pressure or volume. Afferent nerve activity is expressed as a percentage of baseline activity, integrated for the whole filling phase. Since the stimulation substance instillation into the bladder increased the afferent activity approximately 150% as significant changes in our previous studies,[20,22,23] "Cap-sensitive" or "Cap-insensitive" afferent activities were classified based on both pressure and volume increases of more or less than 150% from baseline, respectively, when the bladder was instilled with Cap.

Drugs

Protamine sulfate, GSK1016790A (*N*-((1*S*)-1-{[4-((2*S*)-2-{[(2,4-dichlorophenyl) sulfonyl]amino}-3-hydroxypropanoyl)-1-piperazinyl]carbonyl}-3-methylbutyl)-1-benzothiophene-2-carboxamide),[21,25] and Cap were purchased from Sigma–Aldrich (St. Louis, MO). RN1734 (2,4-dichloro-*N*-isopropyl-*N*-(2-isopropylaminoethyl) benzenesulfonamide)[26] and PPADS (pyridoxal phosphate-6-azo (benzene-2,4-disulfonic acid)) were purchased from Tocris Bioscience (St. Louis, MO). TNP-ATP (2′,3′-*O*-(2,4,6-trinitrophenyl-)ATP) solution was purchased from Molecular Probes (San Diego, CA). GSK and RN1734 were dissolved in *N,N*-dimethylacetamide (DMA), and Cap was dissolved in absolute ethanol as a stock solution. These drugs were stored at −80°C and subsequent dilutions of the drugs were made on the day of the experiment using saline. TNP-ATP and PPADS were diluted/dissolved in saline. PS was dissolved in distillated water. All drugs were instilled intravesically. The doses were chosen according to previous studies in the mouse/rat and our pilot study.[7,20,21,26]

Statistical Analysis

All data are expressed as mean ± SEM. Results were analyzed using two-way ANOVA followed by Tukey's test for multiple comparisons before and after drug instillation. *P* values <0.05 are considered statistically significant.

RESULTS

CMG Measurements

Instillation of the vehicle (0.4% DMA) did not affect cystometric parameters (data not shown). Instillation of GSK significantly reduced BC and VV at 10–30 min; however, the effects were attenuated 40–60 min after instillation (Table I and Fig. 1A).

Instillation of RN1734, TNP-ATP, and PPADS induced no significant changes in cystometric parameters, although BC and VV tended to be increase and PP tended to decrease. When instilled in combination with RN1734, TNP-ATP, or PPADS GSK did not affect any of the cystometric parameters (Table I and Figs. 1A and 2).

Afferent Measurements

In a pilot study, we have investigated whether the both Aδ- and C-fiber afferent activities were influenced by 1 hr PS-exposure but no significant differences were found between before and after PS-exposure (Aδ-fibers; n = 7, base: 100%, after PS-exposure: 95% and 102% based on pressure and volume, respectively. C-fibers; n = 6, base: 100%, after PS-exposure: 102% and 98% based on pressure and volume, respectively).

TABLE I. The Effects of Intravesical Application of GSK1016790A (GSK), RN1734, TNP-ATP, and PPADS on Cystometric Parameters

Parameter	Saline	10–30 min after instillation of GSK	40–60 min after instillation of GSK
GSK1016790A (3×10^{-6} M, TRPV4 agonist), n = 6			
Base pressure (cmH_2O)	3.13 ± 0.56	2.61 ± 0.89	2.71 ± 0.54
Micturition threshold (cmH_2O)	9.61 ± 1.26	7.43 ± 0.50	8.15 ± 1.05
Peak pressure (cmH_2O)	43.54 ± 5.54	42.23 ± 3.44	45.05 ± 5.64
Bladder capacity (ml)	1.42 ± 0.23	0.75 ± 0.25*	1.14 ± 0.11
Voided volume (ml)	1.44 ± 0.22	0.84 ± 0.26*	1.20 ± 0.13

Parameter	Saline	10–30 min after instillation of RN1734	40–60 min after instillation of RN1734	10–30 min after instillation of GSK and RN1734	40–60 min after instillation of GSK and RN1734
GSK1016790A (3×10^{-6} M, TRPV4 agonist) and RN1734 (10^{-5} M, TRPV4 antagonist), n = 6					
Base pressure (cmH_2O)	3.38 ± 0.44	3.09 ± 0.42	3.18 ± 0.54	2.8 ± 0.41	3.68 ± 0.57
Micturition threshold (cmH_2O)	8.21 ± 0.73	8.86 ± 1.98	9.77 ± 2.12	8.85 ± 0.75	10.17 ± 1.41
Peak pressure (cmH_2O)	47.69 ± 3.10	42.45 ± 2.99	46.06 ± 3.28	42.02 ± 2.28	49.83 ± 3.37
Bladder capacity (ml)	1.32 ± 0.22	1.30 ± 0.19	1.69 ± 0.27	1.63 ± 0.07	1.39 ± 0.29
Voided volume (ml)	1.33 ± 0.23	1.36 ± 0.19	1.63 ± 0.27	1.60 ± 0.08	1.44 ± 0.30

Parameter	Saline	10–30 min after instillation of TNP-ATP	40–60 min after instillation of TNP-ATP	10–30 min after instillation of GSK and TNP-ATP	40–60 min after instillation of GSK and TNP-ATP
GSK1016790A (3×10^{-6} M, TRPV4 agonist) and TNP-ATP (3×10^{-5} M, $P2X_3$ antagonist), n = 6					
Base pressure (cmH_2O)	1.97 ± 0.56	2.68 ± 0.32	2.79 ± 0.54	2.28 ± 0.25	2.26 ± 0.44
Micturition threshold (cmH_2O)	12.27 ± 1.89	9.66 ± 1.00	11.95 ± 1.32	9.04 ± 1.55	7.29 ± 0.91
Peak pressure (cmH_2O)	41.42 ± 3.48	36.77 ± 2.61	35.43 ± 3.64	37.73 ± 3.68	38.74 ± 5.26
Bladder capacity (ml)	1.31 ± 0.18	1.00 ± 0.17	1.44 ± 0.13	1.33 ± 0.13	1.16 ± 0.24
Voided volume (ml)	1.43 ± 0.17	1.13 ± 0.15	1.59 ± 0.09	1.44 ± 0.17	1.16 ± 0.23

Parameter	Saline	10–30 min after instillation of PPADS	40–60 min after instillation of PPADS	10–30 min after instillation of GSK and PPADS	40–60 min after instillation of GSK and PPADS
GSK1016790A (3×10^{-6} M, TRPV4 agonist) and PPADS (3×10^{-5} M, nonselective P2X antagonist), n = 6					
Base pressure (cmH_2O)	2.99 ± 0.53	2.43 ± 0.62	3.09 ± 0.81	2.58 ± 0.69	2.70 ± 0.46
Micturition threshold (cmH_2O)	9.17 ± 1.89	9.48 ± 2.02	10.09 ± 2.16	7.83 ± 2.23	9.39 ± 1.12
Peak pressure (cmH_2O)	50.63 ± 5.30	39.77 ± 3.76	40.80 ± 3.67	46.01 ± 6.56	48.28 ± 2.49
Bladder capacity (ml)	1.20 ± 0.23	0.99 ± 0.28	1.48 ± 0.22	1.07 ± 0.27	1.14 ± 0.18
Voided volume (ml)	1.26 ± 0.25	1.07 ± 0.31	1.55 ± 0.22	1.13 ± 0.29	1.19 ± 0.18

Values are indicated as mean ± SEM.
*$P < 0.05$: significant difference from base (two-way ANOVA followed by Tukey's test).

A total of 29 single-unit afferent fibers were isolated in 24 rats (maximum 2 fibers per 1 rat); 7 units corresponded to criteria for myelinated Aδ-fibers (CV: 3.80 ± 0.66 m/sec), and 22 for unmyelinated C-fibers (CV: 1.80 ± 0.09 m/sec). After GSK instillation, bladder compliance did not change significantly (baseline: 0.0223 ± 0.0011 ml/cmH_2O, GSK-1st instillation: 0.0247 ± 0.0011 ml/cmH_2O, GSK-2nd instillation: 0.0217 ± 0.0012 ml/cmH_2O, GSK-3rd instillation: 0.0220 ± 0.0015 ml/cmH_2O). The afferent activity of the Aδ-fibers did not change after either GSK or Cap instillation (Figs. 3A and 4). The afferent activities of C-fibers were divided into two groups by the Cap-sensitivity; Cap-insensitive (Fig. 3B) and Cap-sensitive (Fig. 3C). Among 22 discriminated C-fiber single units, 14 units were classified as the Cap-insensitive fibers, and the remaining 8 units as the Cap-sensitive fibers. Upon GSK instillation activities of the Cap-insensitive fibers in response to the bladder filling increased significantly at the first instillation, but the effect of GSK gradually attenuated at the second and third instillations (Fig. 4). The activities of Cap-sensitive C-fibers showed no significant change by GSK instillation (Fig. 4).

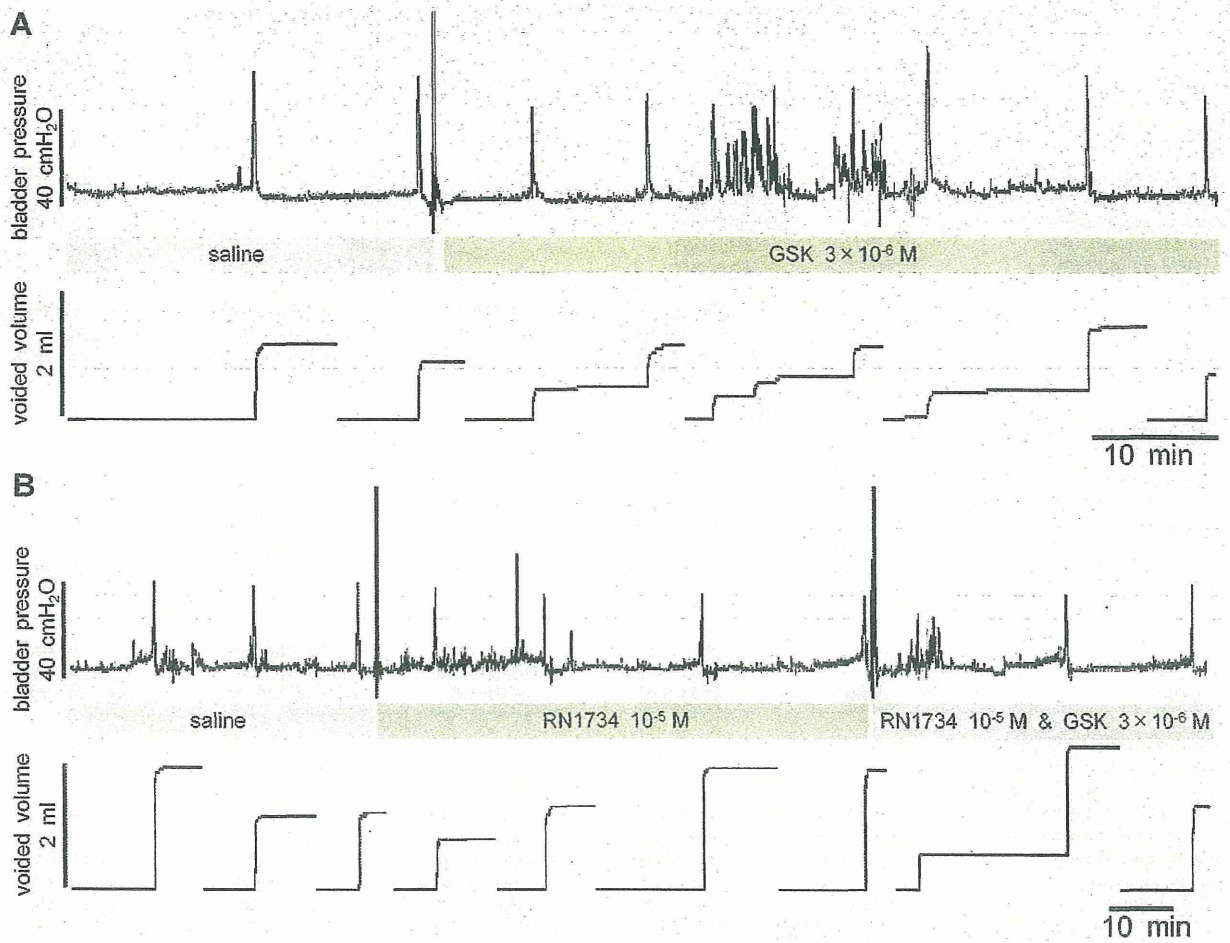


Fig. 1. Representative cystometric recordings (bladder pressure and voided volume) in a conscious free-moving rat before and during intravesical instillation of GSK (A) and RN1734/GSK (B). GSK: GSK1016790A, TRPV4 agonist; RN1734: TRPV4 antagonist.

DISCUSSION

In the present study, we investigated the effects of a TRPV4 agonist, GSK, on CMG and mechanosensitive primary bladder afferent activities by directly instilling this and other compounds into the bladder, hereby yielding direct exposure of the bladder urothelium. Intravesical instillation of GSK significantly decreased BC and VV at first, and then these effects were attenuated with time and disappeared, suggesting desensitization of the receptor. Such desensitization of TRPV4 was reported in a previous study with HeLa cells transiently transfected with TRPV4.[16] The effects of GSK on BC and VV were counteracted by RN1734, a TRPV4 antagonist, although instillation of RN1734 alone caused no significant changes in these cystometric parameters. This implies that the effects of GSK were indeed TRPV4-mediated and that in the absence of exogenous agonist there was little endogenous tone on the TRPV4 receptors under our experimental conditions. In previous reports,[8,21] TRPV4$^{-/-}$ mice had increased BC, suggesting a physiological role of TRPV4 for MT volume. This discrepancy between the previous findings in TRPV4$^{-/-}$ mice and the present findings with RN1734 may occur by differences in experimental condition and species of animal, or occur by the influence of systemic or local TRPV4 channel reaction. Nevertheless, Thorneloe et al.[21] demonstrated that intravesical instillation of 10^{-5} M GSK induced bladder overactivity in TRPV4$^{+/+}$ mice with no effect in TRPV4$^{-/-}$ mice, further confirming that this compound indeed selectively acts via TRPV4. The dose used in that study was higher than that (3×10^{-6} M) used in rats in the present study. These results suggest that the transient activation of the micturition reflex by GSK was mediated through TRPV4, and also suggest that under these specific conditions TRPV4 does not play a role physiologically in control of the MT.

Recently, it has been reported that activation of TRPV4 in rat and mouse bladder urothelial cells induces Ca^{2+} influx-evoked ATP release, and the released ATP modulates bladder sensory transduction.[7,8,18] To test involvement of an ATP-mediated mechanism, we further conducted cystometric investigation with P2X-purinoceptor antagonists. Although neither TNP-ATP, a $P2X_3$-purinoceptor antagonist,[27–29] nor PPADS, a nonselective P2X-purinoceptor antagonist,[30] significantly affected any of cystometric parameters, both antagonists blocked the effects of GSK when instilled in combination

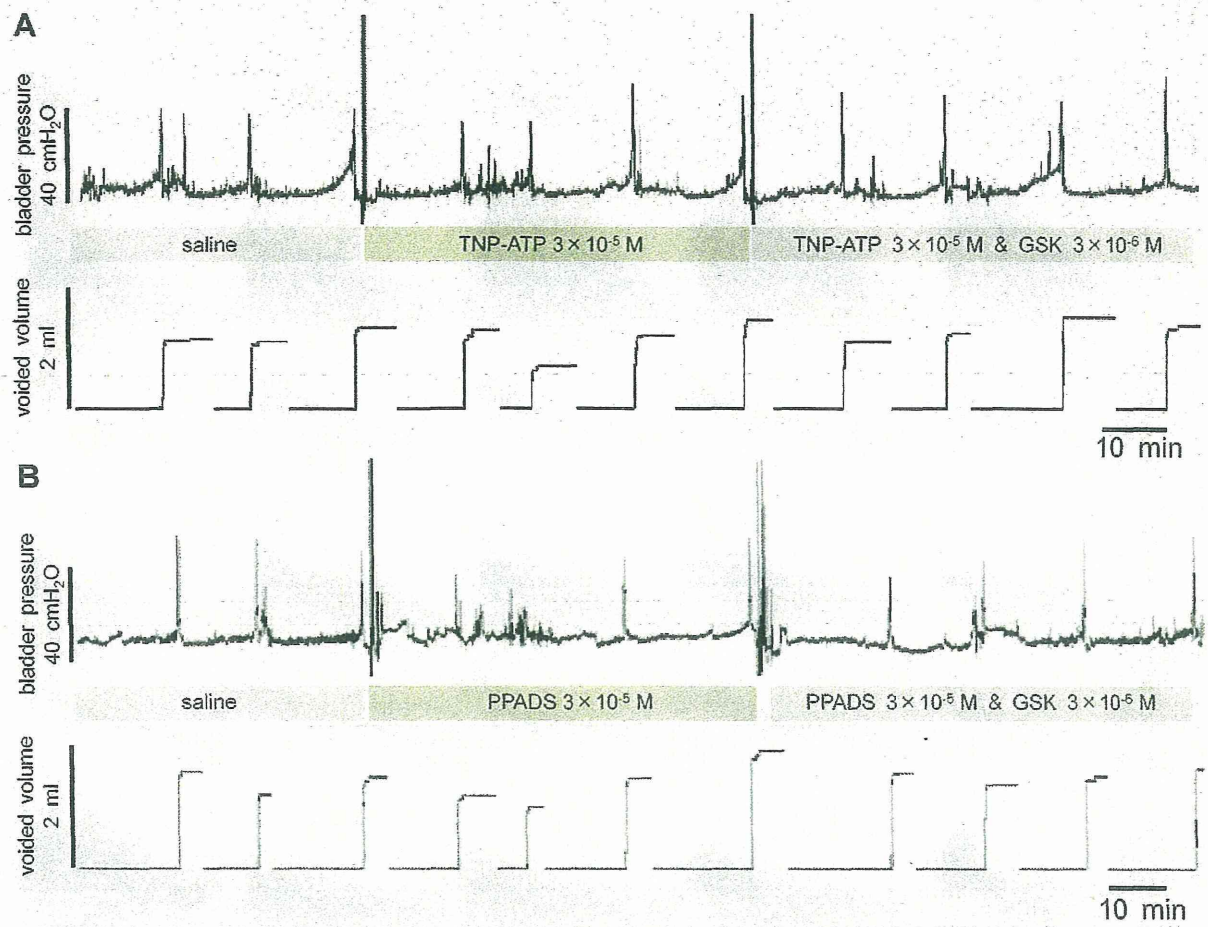


Fig. 2. Representative cystometric recordings (bladder pressure and voided volume) in a conscious free-moving rat before and during intravesical instillation of TNP-ATP/GSK (**A**) and PPADS/GSK (**B**). TNP-ATP: $P2X_3$-purinoceptor antagonist; PPADS: nonselective P2X-purinoceptor antagonist.

with GSK. Birder et al.[7] reported that continuous intravesical instillation of 4α-PDD (10^{-4} M) in conscious and restrained rats significantly increased the amplitude (referred to as PP in the present study) of reflex bladder contractions and tended to decrease the ICI, but PPADS (10^{-4} M) with or without 4α-PDD had no effect on either bladder contraction amplitude or ICI. Moreover, Thorneloe et al.[21] found that instillation of GSK into the bladders induced bladder overactivity characterized as reduction of infused volume (referred to as BC) and VV in $TRPV4^{+/+}$ mice but not in $TRPV4^{-/-}$ mice. These observations mostly consist with our results. Our experimental results were compatible with these previous observations. The desensitization effect of GSK observed in the present study was not detected in those studies, which may be due to the differences of experimental conditions (drugs/its dose, species of mouse/rat, with/without anesthesia). Taken all together, it is assumed that activation of TRPV4 in the bladder urothelium can facilitate afferent transduction from the bladder through urothelially released ATP and subsequent stimulation of $P2X_3$-purinoceptors. Agonist-induced activation of the TRPV4 may cause desensitization when exposed continuously.

As the next step, we evaluated the influence of TRPV4 activation on mechanosensitive afferent fibers from the bladder. In the afferent measurements, we used pretreatment with PS to facilitate permeability of the bladder urothelium because there is a time limitation (within 1 hr) for preserving adequate condition of the afferent nerve fibers isolated for recording, and thus onset time of the drugs instilled intravesically needed to be as short as possible. It has been reported that PS exposure affects only epithelial cells while sparing the underlying layers,[31] and we have found no significant effects of PS-exposure itself on the bladder afferent activities in a pilot study. Moreover, we used urethane anesthesia in this afferent activity measurements. Although urethane has been shown to spare the micturition reflex compared with other anesthetics,[32] Birder et al. pointed out that intravesical application of 4α-PDD, a TRPV4 agonist induced an increase in micturition pressure in awake rats, but this effect was prevented by urethane anesthesia. Even though the influence of urethane–anesthesia may not be neglected under this condition, we have found that intravesical instillation of the TRPV4 agonist GSK facilitated only Cap-insensitive C-fibers but not Aδ-fibers or Cap-sensitive C-fibers among mechanosensitive afferent fibers primarily originating from the bladder. Since the bladder compliance was not significantly increased by the intravesical instillation of GSK, it is unlikely that GSK directly affected

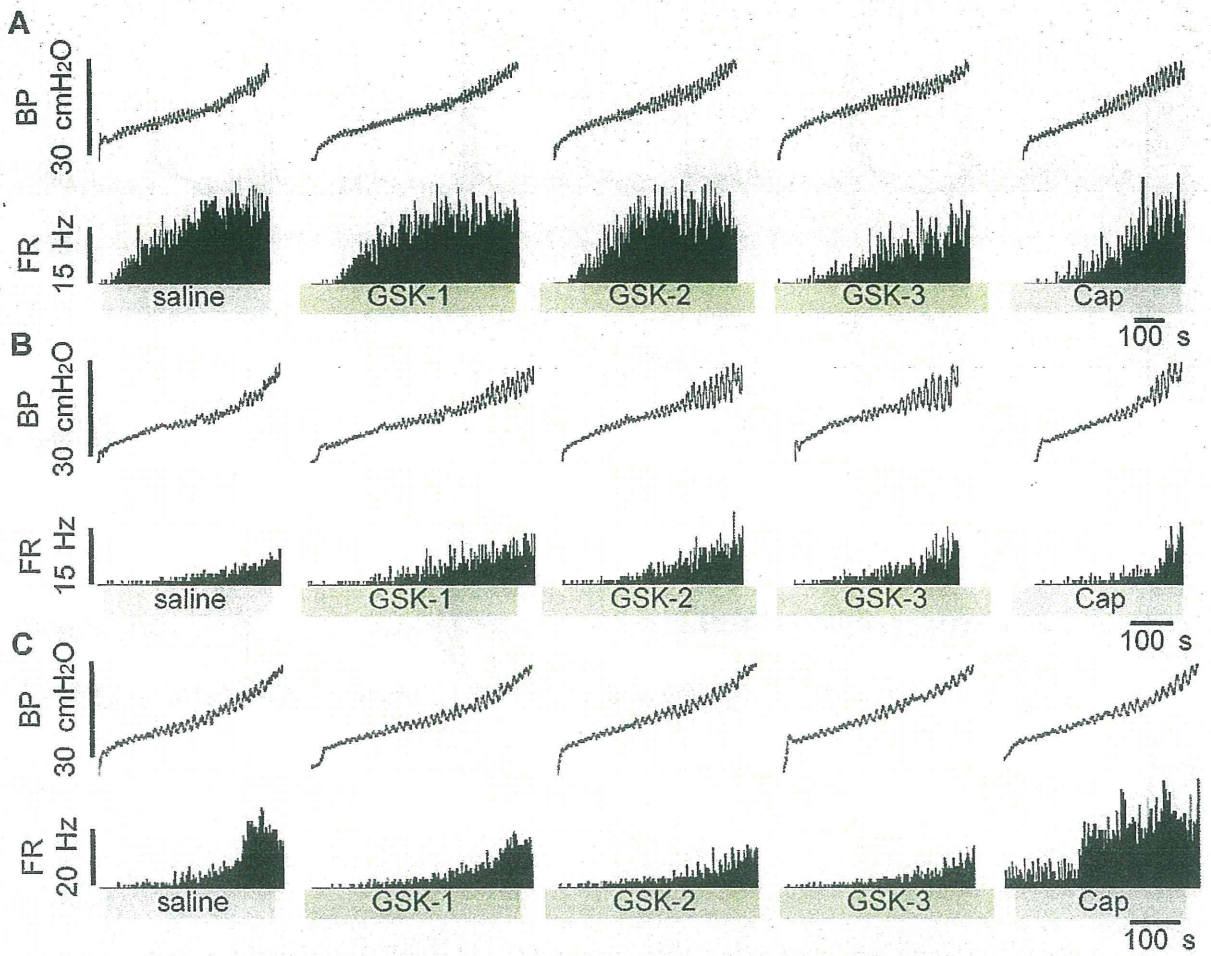


Fig. 3. Representative recordings of bladder pressure (BP) and firing rate (FR) of the Aδ- (**A**), Cap-insensitive C- (**B**), and Cap-sensitive C-fiber (**C**) activities during bladder filling with GSK (3×10^{-6} M) and Cap (10^{-5} M). GSK: GSK1016790A, TRPV4 agonist; Cap: capsaicin, TRPV1 agonist.

detrusor smooth muscle tone. These results are consistent with a previous study demonstrating a very weak expression of TRPV4 in the rat isolated smooth muscle.[7] The present findings in the afferent measurements are consistent with our previous study,[20] where we demonstrated that intravesically instilled ATP activates only Cap-insensitive C-fibers in rats. In that study, we found that approximately 2/3 of mechanosensitive C-fibers were characterized as Cap-insensitive. Together with the cystometric results, it is likely that activation of TRPV4 in the bladder urothelium by GSK can facilitate selectively mechanosensitive Cap-insensitive C-fibers probably though releasing ATP from the urothelium and activating its receptors ($P2X_3$). Gradual attenuation of the facilitatory effect of GSK during the second and third instillations was consistent with the results of CMG measurements. It is conceivable that these observations resulted from desensitization, possibly Ca^{2+}-dependent desensitization of TRPV4. Strotmann et al.[13] found that Ca^{2+}-dependent potentiation of TRPV4 was often followed by inhibition during TRPV4 activation by hypotonic solutions or phorbol esters, suggesting that an excessive increase in Ca^{2+} entry via TRPV4 is prevented by a Ca^{2+}-dependent negative feedback mechanism. In the Cap-sensitive C-fibers, on the other hand, the afferent activities did not change significantly with instillation of GSK, but tended to increase gradually during repeated instillations. Although GSK is reported to be approximately 10-fold more potent activating TRPV4 than activating TRPV1 channels,[25] it is possible that GSK can also act on TRPV1 channels when instilled intravesically at a high concentration, and this might contribute to the gradual increasing tendency of the activities in Cap-sensitive C-fibers with GSK. In the afferent measurements, we did not investigate the effect of the combined drug administration (RN1734, TNP-ATP, or PPADS) with GSK because there is time limitation for keeping adequate responsiveness of SAAs, and its desensitization effect after Cap administration. However, further experiments with combined drug administrations would be helpful for our knowledge.

CONCLUSIONS

The present results suggest that activation of TRPV4 in the bladder facilitates the micturition reflex by activation of